明治大学におけるロジックモデル・評価指標を活用した PDCAサイクルの運用

- 「アクションプラン制度」を事例に-

令和7年度 第2回大学等の質保証人材育成セミナー 大学の未来をデザインする:ロジックモデルを用いた計画の体系化

2025年9月17日(水)学術総合センター(一ツ橋)

山本幸一(明治大学)

https://researchmap.jp/ko_yamamoto/



バックグラウンド 自己紹介を兼ねて

● 明治大学 教学企画部 教学企画事務室

学長政策、学部長会、中長期計画、設置認可、補助金、施設整備計画、教学組織改革、 大学評価、IR、学長秘書等を所管。

- 大学基準協会にて、大学評価分科会委員、内部質保証のあり方に関する調査研究部会調査研究員等を経験
- 現在は、日本私立大学連盟 情報分科会 部会長、PDCAサイクル研修運営委員長、大学改革・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員、山形大学IRプログラム(履修証明プログラム)講師、大学評価コンソーシアム幹事
- 最近の論考・報告
 - ・ 大学の教育学習領域における業績指標設定の日欧比較、高等教育質保証学会第14回大会(2025)(ポスター発表、共同研究者)
 - Institutional Researchの大学DXへの応用可能性 グラフの活用とデータ分析のプロセス 「大学評価とIR」(18)pp25-37(2024)
 - ・ 議論を生み出すIR『IDE 現代の高等教育 』(649) pp23-27(2023年)
- 明治大学大学院 ガバナンス研究科 修士課程修了、公共経営学、政策評価専攻



目次 講義:30分

1 評価への「ロジックモデル」導入の背景

- (1)個別最適から「全体最適のマネジメント」
- (2)計画と点検・評価が連関した「改善サイクル」
- 2 改善アクションプラン(3か年計画)制度
- 3 ロジックモデルの効用
 - (1) 改善アクションプランの効果
 - (2)政策体系化、階層化の効用
 - (3) 評価指標・評価基準設定の効用
- 4 まとめ:ロジックモデルと評価 運用ポイント

はじめに:事例のポイントーロジックモデルを応用した点ー

1 政策体系の階層化 ☞ 全学と部局の連関

◆ 活動(Inputs/Activities)から成果(Outputs/Outcomes)への因果関係を視覚的に示し、計画の目的や階層構造を明確にします。本事例では、全学方針と部局活動を論理的に連関を説明し、関係者の理解や合意形成の促進に活用

2 長期的な時系列の論理フロー ☞ 計画と評価の一体化

◆ 事前に計画(成果・指標・達成手段)が明確になるため、効果測定と連携し、改善に必要な情報が得られます。本事例では、改善計画を、3段階の時間軸(年度・3年後・最終)で示し、毎年度の評価(PDCA)により、3年間で確実に改善するために活用

3 政策の可視化 ☞ 情報共有と協働促進

◆ 政策や成果が可視化されるため、関係者(執行部、部局、教職員)との情報共有に有効です。全体方針に沿って部局計画を設計しやすく、協働が促進されます。本事例では、全学方針を、複数の部局の協働で1つの目的達成を目指すタイプの政策運営に活用



1 評価への「ロジックモデル」導入の背景

- 個別最適から全体最適を図る「改善サイクル」の構築を目指して

1998年度

駿河台キャンパス再開発(リバティタワー)

2004年度

情報コミュニケーション学部の設置

2007年度

大学評価申請・受審

2008年度

▼「改善アクションプラン」 ロジックモデルを背景とした改善ツール

2009年度

国際日本学部の設置,G-COEプログラム(数理拠点)採択

2010年度

グローバル30に採択

2011年度

入学志願者数全国1位

2012年度

明治大学グランドデザイン2020作成

2013年度

グローバル人材に採択, 世界展開力に採択

2014年度

総合数理学部の設置, 中野に新キャンパス開校

大学評価申請・受審

▼「改善アクションプラン」の継続

2015年度

SGU(スーパーグローバル大学創成支援事業)採択

ざっくりした認証評価結果を, いかに改善するか



例えば:認証評価結果 「国際交流が低調」

確かに、外国人留学生は少なく、海外派遣プログラムも少ないかも知れない。

国際部の不安

制度やプログラムを整備してもよいが、学部教授会が、外国人留学生の受け入れや、学生の海外派遣を後押ししてくれるのか。

学部の不安

外国人留学生の増加や学生の海外派遣を増やすには、学部の努力やノウハウだけでは難しい。

学生部の不安

学生の海外派遣はよいが、「休学留学」では学費は2倍になるが大丈夫なのか。 外国人留学生のための学生寮は学生部では管轄していないが・・・。

全学の目標(方針)に対する 部門の作戦(年度計画書)の不安

課題:全学方針と部局計画が独自性を発揮しやすい教学システム

部局「縦割り」になりやすい構造 -全学方針と部局サイクルが連関しないPDCAサイクル-



- ① <mark>全学目標</mark>を共有し、1つの方針ごとに<mark>複数部局で協働出来る</mark>仕組みとは?
- ② 目的完遂のために、改善に資するフィードバック情報を得るには?



③ アウトカム別 に政策体系を整理できないか?

- a. 外国人留学生の増加に向けて, いくつの作戦を実行したのか
- b. その結果, 成功した作戦はどれで, 成果が上がらなかった作戦は何か。(寄与度)
- c. その原因は何か。次にどのような手段を講ずればよいのか。
- d. 目的を期限内に「完遂(目標達成)」できたのか

ロジックモデルにより、計画を体系化する仕組みを「制度化」する



2 改善アクションプラン制度

ロジックモデルを理論的背景とした目的必達に向けた仕組み

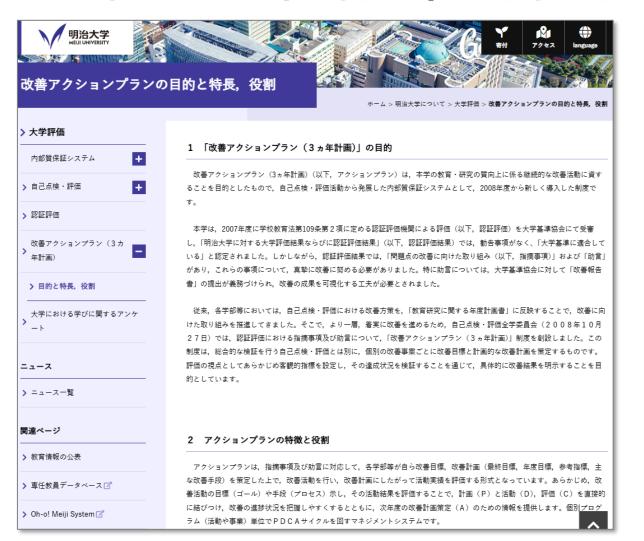
評価結果(認証評価、外部評価、自己点検・評価)のうち、数年かけて改善が必要な事項の目標を管理する制度(認証評価「改善報告書」提出が目的)



- Logic ModelとPerformance Measurementが理論的背景
 - 1 解決すべき「問題」の明文化(何をクリアしたら終わるのか)
 - ② 最終成果(アウトカム:全学方針)と活動目標(アウトプット:部局目標)の区分け
 - ③ 数値目標(評価指標・評価基準)の設定
 - 4 3段階での期限設定(年度・3年後、最終)
 - ⑤ 毎年度の業績測定、計画改善(実行度,達成度,成果へのインパクト)
 - 6 年度計画書と自己点検・評価報告書、予算との連動

改善アクションプラン制度(3カ年計画)の特色

● 大学評価Webサイトに掲出(目的、役割、記入見本、対象プログラム一覧)





改善アクションプラン制度(3カ年計画)の概要

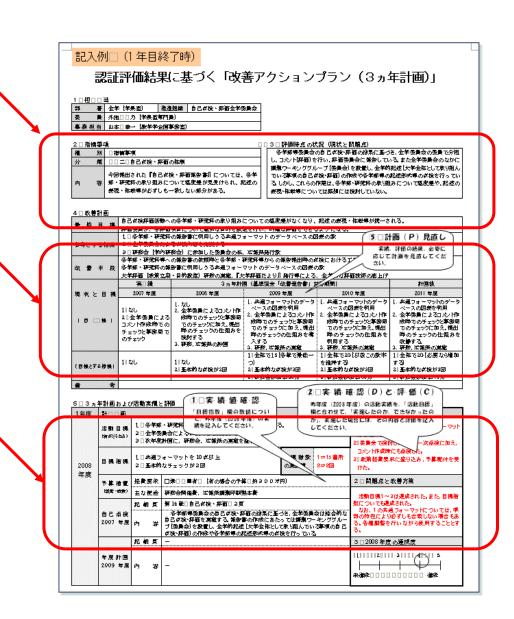
- 導入背景:認証評価結果への対応
 - 第1期では認証評価結果から約80プログラムに適用、以降、自己点検・評価結果も対象に今日まで継続
- 目的:目標の完遂=計画と評価の一体化
 時間経過とともに、「目的達成に向けた計画・取組み」
 をレベルアップを図ること
- 役割:政策の可視化、協働促進(継続的改善) 政策の可視化により、全学方針と部局計画の一体化
- 特徴:チェックシート
 - 新しい仕組みではなく、「年度計画書」と「点検・評価報告書」を突合するチェックシートとして導入、計画と評価の効率・効果の向上



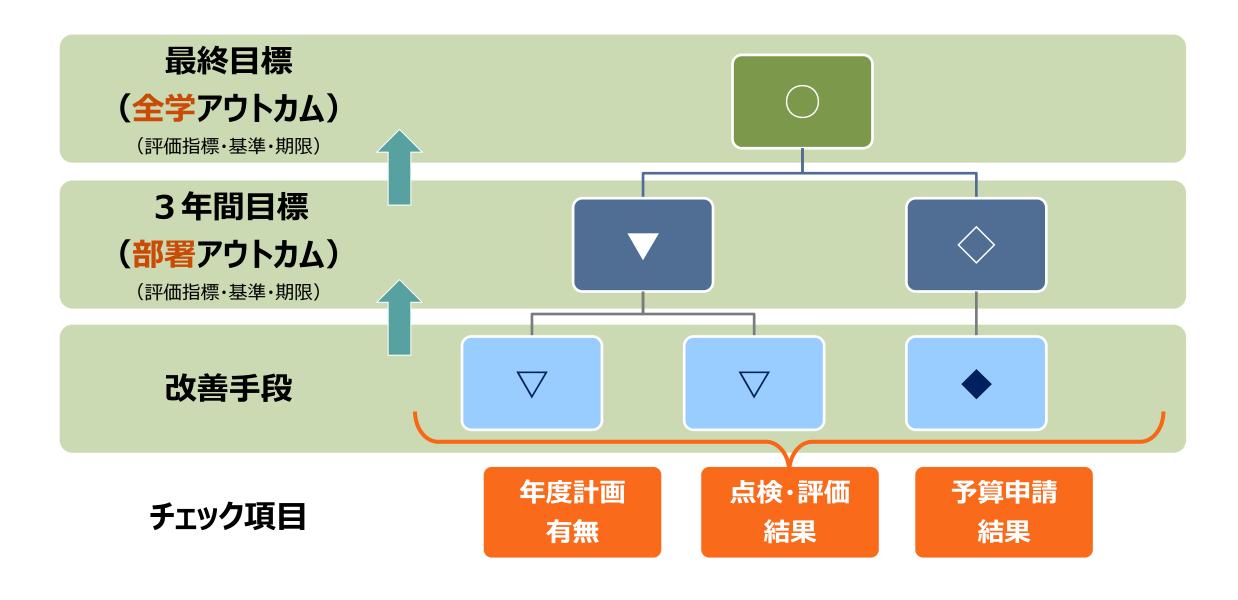
改善アクションプラン制度(3カ年計画)の記載内容

- 初年度に、3段階のアウトカムを設定
 - 最終目標(全学アウトカム)と3年後の目標(部署アウトカム),年度ごとの目標(部署アウトプット)
 - → 全学方針と部署取組みの整合
- 達成手段、評価指標・基準、期限 アウトカム達成に向けた手段等の明確化
 - → 何をもって達成したのかを予め共有 にはいる。という側面もあり
- 改善のためのフィードバック情報

毎年度の業績測定の結果を記載。実績のみに注目しがちな評価を、長期ビジョンに寄与の度合いから達成手段の妥当性を評価し、3年後目標を必ず達成する。

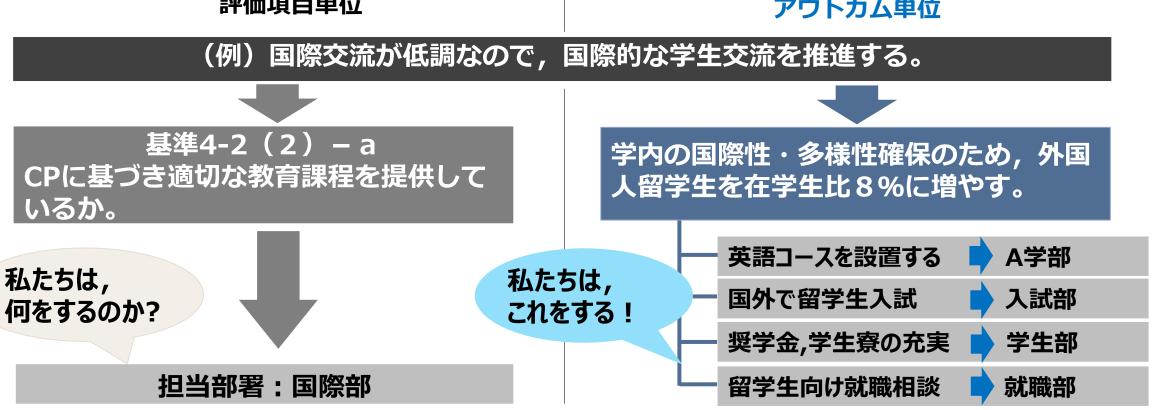


改善アクションプラン(3カ年計画)シートの模式図



認証評価基準評価項目単位

改善アクションプラン アウトカム単位



- ゴール(達成すべき状態:アウトカム)を明確に示す
- 1つの目的に向け複数部局が役割分担(協働)することで、目的を必達する



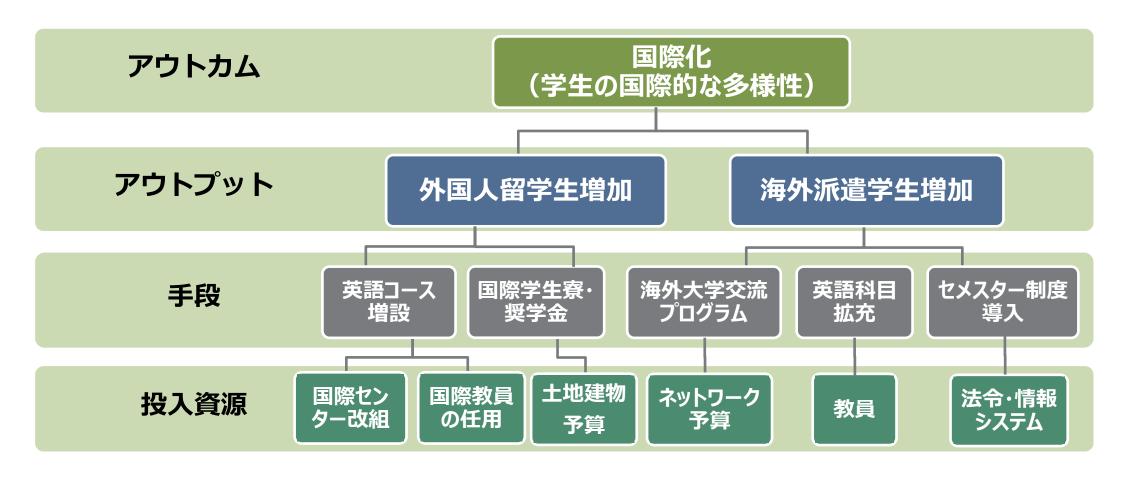
3 ロジックモデルの効用

- 「改善アクションプラン制度」の効果

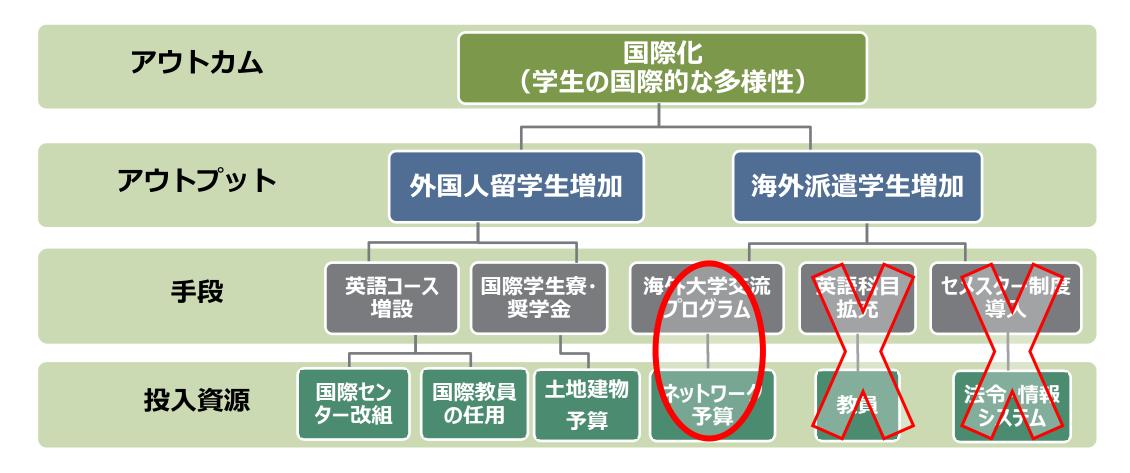
評価	主なアクションプラン	改善・改革の実践と成果
学部、研究科において、国際交流のより一層の推進が望まれる。	出し数の増加	 国際センター改組,国際連携機構を設置,機構教員を配置 国際化拠点事業(G30)採択→SGU採択 学部・研究科独自プログラム実施 留学生の増加(07年/11年/24年) 外国人受入 626名→1,126名→2,319名 海外派遣 232名→664名→2,101名 英語コース(1学部,3研究科)開設

全学的改革で 国際化を支援

- インターナショナルハウス竣工, 奨学金 [学生部]
- 英語科目拡充, セメスター制度, インターンシップ留学 [教務部]
- 留学生キャリア教育, 就職相談の実施 [キャリアセンター]



ロジックモデル で整理すると



ロジックモデル で整理すると

- ・アウトカムとした「数字」には,手段やアウトプットの実績値も混在
- ・アウトプットに直接結びつかない「手段」もあり

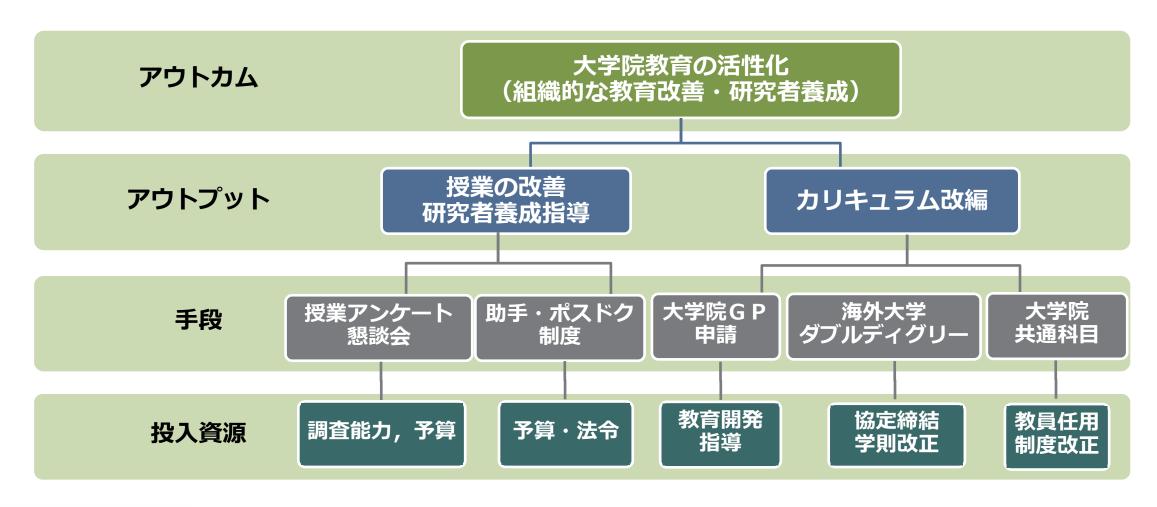
※実際には、より複雑なモデルになる。ここでは説明の簡易版として表示した。

F D が組織的	評価	主なアクションプラン	改善・改革の実践と成果
(2010年度)。 ● 学内GPによる育成制度の創設, 2007年理工研,	FDが組織的	● カリキュラムの充実	科)。 ● 海外の大学院とのダブルディグリー制度の創設 (2010年度)。

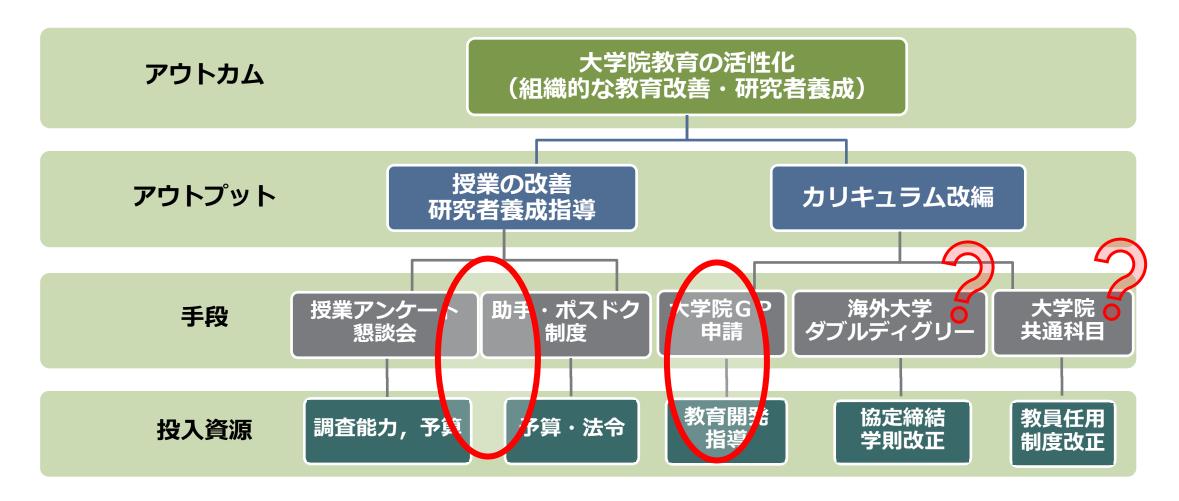
全学的改革で 大学院を支援

- 柔軟な教員任用制度(特任教員,大学院担当教員)の創設 [教務部]
- 研究者養成制度(助手,ポスドク等)改善[研究・知財戦略機構]
- 学内GP制度の創設 [財務部]

大学院教育改革の政策体系をロジックモデルで整理(修正前)



ロジックモデル で整理すると



ロジックモデル で整理すると

- ・「FDが不十分」に対して、問題を深堀りして、アウトカムを設定していた
- ・結果的に、FDだけではなく、大学院改革につながった(評価の積極活用)

※実際には、より複雑なモデルになる。ここでは説明の簡易版として表示した。

国際交流の推進

学生を海外に派遣したい

必要経費や、 期待する効果が不明瞭



昨年派遣した20名中18名は16 単位以上を修得し、うちA評価が 8割を超えた(業績測定)

評価指標・判定基準

- 修得単位数16単位以上
- A評価の割合80%以上

奨学金の増額を

今年も「20名」派遣するので奨学金を措置して欲しい。

教育研究環境の適正化

心理相談のスペースを増 設して欲しい

必要面積や、センターとして 必要な相談件数が不明瞭



院生20名の臨床のため年間3千名の診察が必要。現施設では 1800件が限界(ベースライン)

評価指標・判定基準

- 大学院学生20名の臨床に必要な相談件数
- 年間約3,000件

相談者が増えて対応が困難になっている。

3千名の診察には、現状3部屋から5部屋は必要。相談件数増の傾向から3,000名の確保は可。

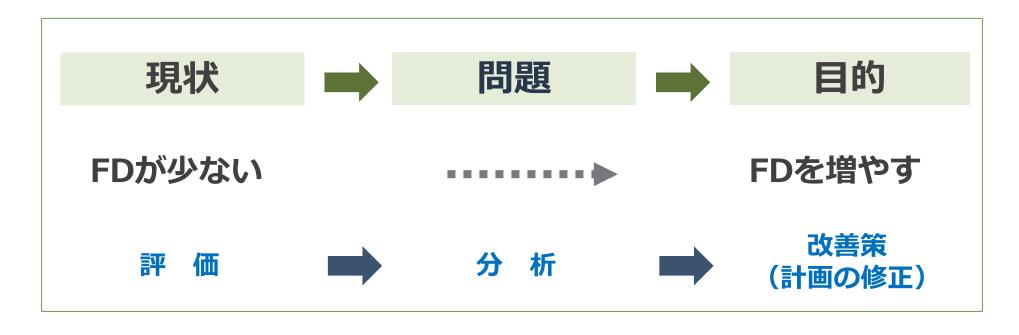
評価指標の活用:自己点検・評価でのデータ活用が、IRの整備に展開



4 まとめ:ロジックモデルと評価

- 「改善」を達成するための運用上のポイント

- 現状(現象)を、そのまま「目的化」している。
- ●今「誰に、何が起きているのか」、問題分析が弱い。

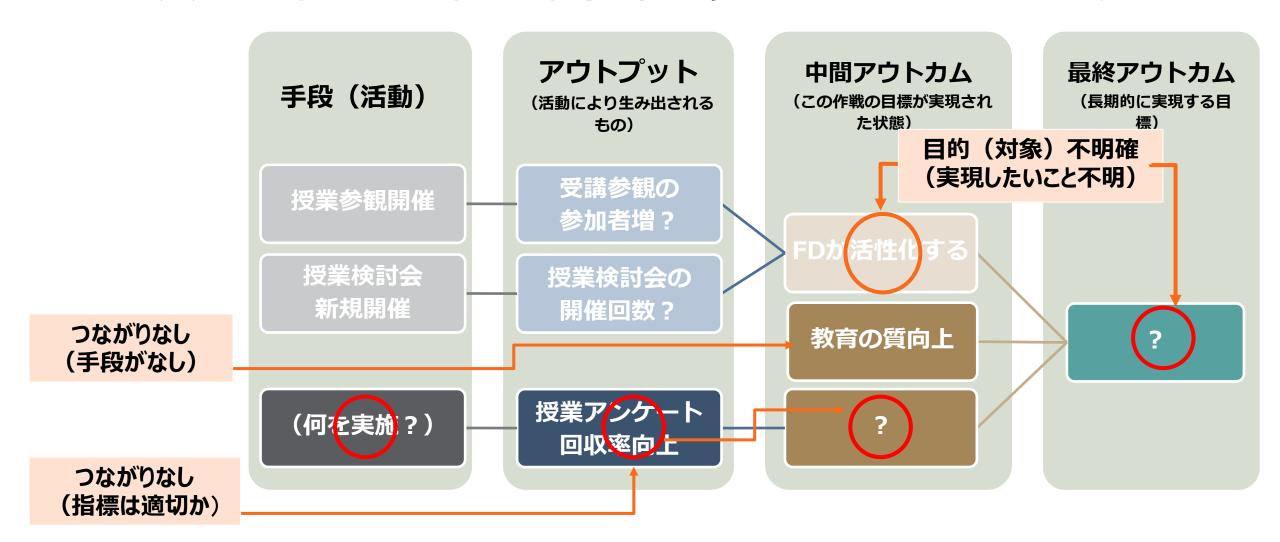




なにが問題か:ロジックモデルで整理する

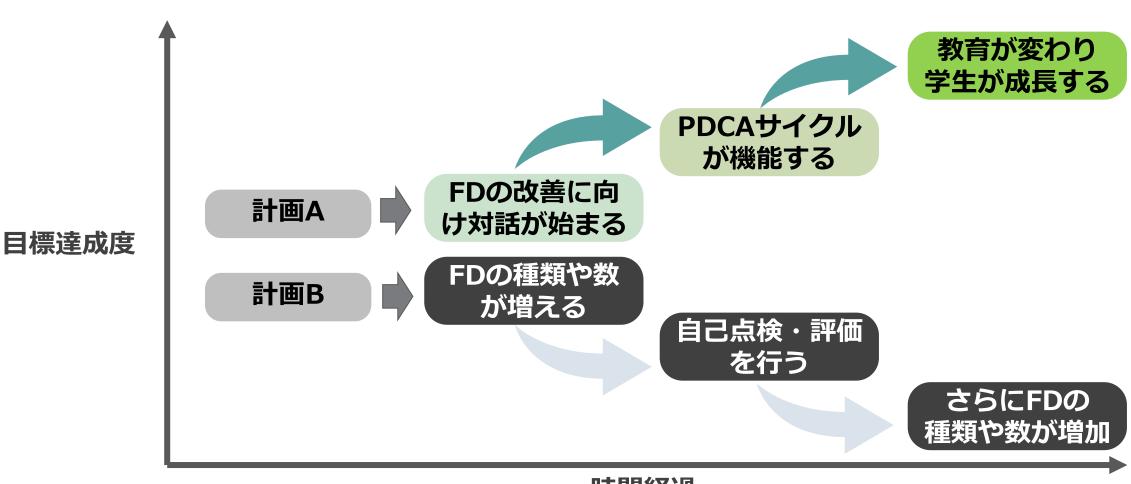
ロジックモデルで次期計画を可視化する①

アウトカム(何のために)が不明(目的 – 手段の階層構造なし) …ただ、授業アンケートの回収率が高まり、FDの参加者・回数が増える



ロジックモデルの効用:目標を共有し、長期目標に向けて動く

ロジックモデル導入:数年後には、大きな差が生じる可能性

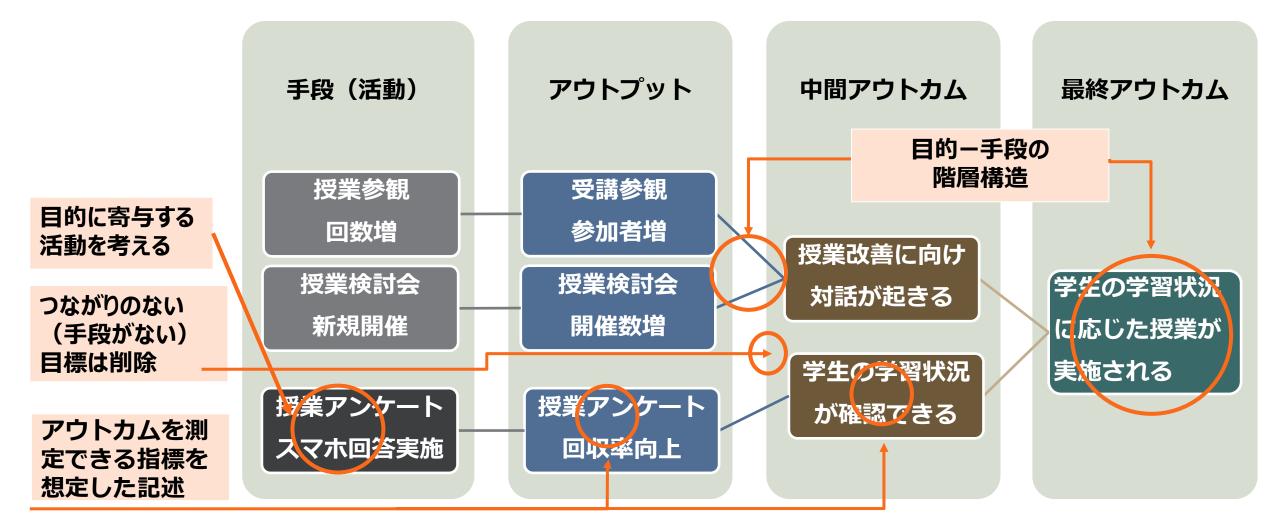


時間経過

自己点検・評価:次期計画をロジックモデルで可視化する②

ロジックモデルあり(目的、対象が明確、階層構造あり)

…改善策(手段)が、<mark>長期目的・受益者のため</mark>に向けて動きだす



何が起きて、誰が困っているのか、問題分析を怠らない

- 問題をとらえ、事業の目的を設定するポイント
 - (①現状把握) FDが少ないことで、何が問題として生じているのか。
 - (2受益者) 誰が困っているか? FDがなく困るのは教員か、学生か?
 - (3目的)何を、どのような状態に変えたいのか。ゴールの状態は何か?

現状 目的 問題 FDを増やす FDが少ない ②受益者と問題 ③ゴールの状態 ①現状把握 教員が適正に成績評 学生に不利益、教員の 成績に甘辛がある 価できる 力量

C評価になる学生が多い

初年次退学が多い

学生に不利益、学力 と授業のミスマッチ

大学の損失、学生に不利 益、授業満足度が低い

学生の学習レベルにあっ た教育が提供される

学習意欲を高める授業方 法が実施される

- 問題を目的に変換して、まず「目的」を設定する
- 手段を先に決めると、真の問題解決には至らない

このようなことは、ありませんでしょうか?

自己点検・評価に基づいて、次期改善計画を提出してください

自己点検・評価結果

FD活動は、新任教員研修会および相互授業参 観4科目に留まり、低調であった。授業アン ケートの回収率も低い。

改善計画

授業改善検討会の開催のほか、相互授業参観科目を増やし、FDを活発化し、教育の質向上をはかる。授業アンケートの回収率を高める。

- ✓ 自己点検・評価結果に基づいた改善計画として、問題はないはず。
- 何かを改善する計画になっているでしょうか。
- ところで、なぜ、FDの活性化が必要だったのでしょうか?
- 誰の、何が、改善される計画のでしょうか。

参考文献

- Samuel, S., & Farrer, H. (2025). Integrating the PDCA cycle for continuous improvement and academic quality enhancement in higher education. *Journal of Comparative & International Higher Education*, 17(2), Article 12, 115-124.
- 山本幸一(2024)「Institutional Researchの大学DXへの応用可能性 グラフの活用とデータ分析のプロセス 」, 大学評価とIR, 18 巻, p. 25-37
- 藤原宏司(2023)「米国におけるアクレディテーション、IE(含:教学マネジメント)およびEM等に対するIRの役割」継続的改善のためのIR/IE セミナー 2023、報告資料
- 埴岡健一(2023)厚生労働省令和5年度第1回医療政策研修会グループワーク「ロジックモデルの活用」、スライド資料(2023年6月 2日)
- 山本幸一(2021)「内部質保証と評価指標をロジックモデルで整理する」ロジックモデル&指標設定演習、継続的改善のための IR/IEセミナー2021、報告資料
- 山本幸一(2021)日本私立大学連盟オンデマンド「PDCAサイクルと大学における改革・改善のマネジメント」、第2回 計画策定と評価・分析の準備、報告資料
- 山谷清志監修・源由理子・大島巌編著(2020)『プログラム評価ハンドブック』、晃洋書房
- GSG 国内諮問委員会 社会的インパクト評価ワーキング・グループ(内閣府)(2017)社会的インパクト評価ツールセット実践マニュ アル(Ver. 2.0)(2017年6月29日)
- Temponi, C. (2005). Continuous improvement framework: implications for academia. *Quality Assurance in Education*, Vol. 13 No. 1, pp. 17–36.
- Rossi, P.H., Freeman,H. E., and Lipsey, M. W. (2004) Evaluation: a systematic approach, 7th ed.,Sage Publications (『プログラム評価の理論と方法─システマティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド』 大島巌他訳、日本評論社、2005年)
- W.K. Kellogg Foundation (2004) Logic Model Development Guide. Michigan: W.K. Kellogg Foundation.
- ハリー.P.ハトリー(2004)『政策評価入門ー結果重視の業績測定』 東洋経済新報社
- 古川俊一・北大路信郷(2002)『新版 公共部門評価の理論と実際』 日本加除出版



Making Campus Decisions Better



Thank you for your attention.

明治大学 山本 幸一 ma94004@mics.meiji.ac.jp

https://researchmap.jp/ko_yamamoto/